

# 黒いちょうとお母さん

小川未明

青空文庫



このごろ毎まい日にちのようひるすに昼過ひるすぎになると、黒くろいちようが庭にわの花か壇だんに咲さいているゆりの花はなへやつてきます。

最初さいしよ、これに氣きがついたのは、兄あにの太郎たろうさんでした。

「大きい、きれいなちようだな。小鳥ことりぐらいあるかしらん。弟おとうとが

見みつけたら、きつとつかまえてしまうだろう、今年ことしの夏なつは、すば

らしい昆こん虫ちゆうの標ひよう本ほんをつくるのだといつていたから。弟おとうとの

帰かえらないうちに、はやく逃にげていつてしまえばいいにな。」

太郎たろうさんは、こう思おもいながら、白しろいゆりの花はなにとまつてみつを

吸すつているくろあげはを見守みまもつていました。ちようは、すこしの

不安ふあんもなく、さもたのしそうに、花はなにたわむれているごとく見みえ

ました。

そのうちに、十分<sup>ぶん</sup>、みつを吸<sup>す</sup>ってしまったので、ひらひらと重<sup>おも</sup>そうに、翅<sup>はね</sup>をふつて垣根<sup>かきね</sup>を越<sup>こ</sup>えて、まぶしい、空<sup>そら</sup>のかなたへ、飛<sup>と</sup>んでいってしまいました。

翌<sup>よくじつ</sup>日は、土曜<sup>どようび</sup>日で、二郎<sup>じろう</sup>さんも早<sup>はや</sup>く学<sup>がっこう</sup>校<sup>こう</sup>から帰<sup>かえ</sup>ってきました。そして、みんなが、お縁<sup>えんがわ</sup>側<sup>はなし</sup>で話をしました。

「うちのゆりは、やまゆりだろう。あの種<sup>たね</sup>子はどうしたのだろうね。」

二郎<sup>じろう</sup>さんは日<sup>ひ</sup>の光<sup>ひかり</sup>に、銀<sup>ぎん</sup>色<sup>いろ</sup>にかがやいているゆりを見<sup>み</sup>ていいました。

「お父<sup>とう</sup>さんが、田舎<sup>いなか</sup>から、持<sup>も</sup>っていらしたのだ。」と、太<sup>た</sup>郎<sup>ろう</sup>さん

が教おしえました。

「山やまへいくとたくさん咲さいているのだろうね。田舎いなかへいつてみた

いもんだな。」

「年ねんすう数の古ふるいものほど、花はながたくさん咲さくのだそうだ。」

「うちのは、いくつついているかしらん。」

こんなことを兄きょうだい弟あが、話はなし合あつているときに、ちようと昨きのう日の黒くろいちようが、どこからかゆりの花はなを目めざして飛とんできまし  
た。

「あ、くろあげはだ。静しずかにしておくれ、僕ぼくいま網あみを持もつてきて、つかまえるのだから……。」「と、これを見みつけた二じろう郎うさんは、目めの色いろを変かえて起たち上あがりました。

「ばかなちようだな、飛とんでこなければいいのに……。」と、兄あにの太郎たろうさんは舌打したうちをしました。

「なにをいつてんだい。僕ぼくいろいろな虫むしを採集さいしゅうして標本ひょうほんをつくるんじゃないか。」

二郎じろうさんは、はや、捕虫網ほちゅうあみを持もつてきました。すると、突とつぜ然んお母かあさんが、

「あのちようを捕とつてはいけませんよ。あの黒くろいちようは、毎まいに日ちいまごろ、ゆりの花はなに飛とんでくるのです。お母かあさんは、とうから氣きがついていました。」

これをきくと、太郎たろうさんは、昨日きのうばかりでないのかと思おもいました。

「なぜ、とつていけないのですか。」と、二郎さん<sup>じろう</sup>がたずねました。

「あのちようは、お母さん<sup>かあ</sup>ですから。」と、お母さん<sup>かあ</sup>がいわれたので、二人<sup>ふたり</sup>は、びつくりして、お母さん<sup>かあ</sup>の顔<sup>かお</sup>を見<sup>み</sup>つめたのであります。

「お話を<sup>はなし</sup>してあげますから……。」と、お母さん<sup>かあ</sup>がおつしやつたので、二郎さん<sup>じろう</sup>は、捕虫網<sup>ほちゅうあみ</sup>をそこ<sup>そこ</sup>に投<sup>な</sup>げ捨<sup>す</sup>て、太郎さん<sup>たろう</sup>とお行<sup>ぎ</sup>儀<sup>ぎ</sup>よく並<sup>なら</sup>んで、お母さん<sup>かあ</sup>の前<sup>まえ</sup>にすわりました。

お母さん<sup>かあ</sup>は、お話を<sup>はなし</sup>おはじめになりました。

「あるところに、四つばかりのかわいらしい女<sup>おんな</sup>の子<sup>こ</sup>がありました。毎日<sup>まいにち</sup>お昼<sup>ひる</sup>過ぎ<sup>す</sup>になると、いつのまにか、大<sup>おお</sup>きなげたをはいて、

お家<sup>うち</sup>からぬけ出<sup>だ</sup>しました。

日<sup>ひ</sup>のかんかん照<sup>て</sup>らすほかには遊<sup>あそ</sup>ぶお友<sup>とも</sup>だちもいません。あちらの野原<sup>のほら</sup>の方<sup>ほう</sup>を見ると、草<sup>くさ</sup>の葉<sup>は</sup>が光<sup>ひか</sup>つてかすんでいました。

『おじいちゃんのとこへ、いこうかな。』と、ぼんやり立<sup>た</sup>つていますと、

『お母<sup>かあ</sup>ちゃんにしかられるからよしながいい。』と、電線<sup>でんせん</sup>にたまっているつばめが幾羽<sup>いくわ</sup>も、口々<sup>くちぐち</sup>にさえずりながら止<sup>と</sup>めたのであります。

けれど、おじいさんのところへゆくのを思<sup>おも</sup>いとどまりませんでした。した。大<sup>おお</sup>きなげたをひきずって野原<sup>のほら</sup>を歩<sup>ある</sup>いていきました。いろいろな花<sup>はな</sup>が咲<sup>さ</sup>いて、ちようが飛<sup>と</sup>んだり、とんぼがとんだりしていま



した。

野原のほらの中に、小舎なかがありました。少女しょうじょは前まえにくると、

『おじいちゃん、あそびにきた。』といいました。するとおじいさんが、顔かおを出だして、

『おお、よくやってきた。』といって、少女しょうじょを抱だき上げあてくれ  
ました。

『おじいちゃん、それなんにするの……。』

『このからすはもうじき、川かわ開わきがくる、そのとき上あげる花火はなび  
の中なかにいれるのだ。』

おじいさんが仕事しごとをしながらおもしろい話はなしをしてくれるのを少すこ  
女ようじょは、そばでおとなしくしてきいていました。

そのうちに、遠くで、雷の音がゴロゴロとしました。

『うちで心配しんぱいしているといけないから、もう帰かえりな。おじい

やんが送おくつてやる。』と、おじいさんは、花火はなびを造つくっている小舎こや

から出でて、屋根やねの見える町まちまで少しょう女じょを送おくつてくれました。

おうちへ帰かえると、お母かあさんが、

『あれほど、あぶないから、花火小舎はなびこやへいつてはいけないとい

たのに。』と怖こわい顔かおをしてしかりましたので、少しょう女じょは泣なき出だ

しました。

すると祖母おばあさんが出でてきて、

『子供こどもはりくつをいっただってわからない。かわいがるもの

のそこへいくものだ。』といわれたのです。おまえたちは、その女おんなの

子をだれだと思<sup>おも</sup>うの、お母<sup>かあ</sup>さんなんです。このごろ、ちようが、  
毎<sup>まい</sup>日<sup>にち</sup>ゆりの花<sup>はな</sup>へくるのを見<sup>み</sup>て、お母<sup>かあ</sup>さんは昔<sup>むかし</sup>の自分<sup>じぶん</sup>のことを思<sup>おも</sup>  
い出<sup>だ</sup>していたのです。ああしてなにも知<sup>し</sup>らずに喜<sup>よろこ</sup>んでくるものを、  
捕<sup>と</sup>つたり、殺<sup>ころ</sup>したりなどしてはいけません。」

お母<sup>かあ</sup>さんは、お話<sup>はなし</sup>をして、こうおつしやつたのでした。太郎<sup>たろう</sup>さ  
んも、二<sup>じろ</sup>郎<sup>う</sup>さんもお母<sup>かあ</sup>さんの子<sup>こ</sup>供<sup>ども</sup>の時<sup>じ</sup>分<sup>ぶん</sup>の姿<sup>すがた</sup>を空<sup>くう</sup>想<sup>そう</sup>しました。  
そして愛<sup>あい</sup>と光<sup>ひかり</sup>につつまれた世<sup>せ</sup>界<sup>かい</sup>をなつかしく思<sup>おも</sup>いました。けれど、  
そのときの自<sup>し</sup>然<sup>ぜん</sup>と、いまの自<sup>し</sup>然<sup>ぜん</sup>とどこにちがいがあろう。そう思<sup>おも</sup>  
つてふり向<sup>む</sup>くと、花<sup>か</sup>壇<sup>だん</sup>には平<sup>へい</sup>和<sup>わ</sup>な日<sup>ひ</sup>の光<sup>ひかり</sup>が満<sup>み</sup>ちていました。



# 青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 10」講談社

1977（昭和52）年8月10日第1刷発行

1983（昭和58）年1月19日第6刷発行

※表題は底本では、「黒《くろ》いちようとお母《かあ》さん」  
となっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：仙酔ゑびす

2011年12月1日作成

2012年9月28日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 黒いちょうとお母さん

小川未明

2020年 7月13日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>